

この空の下で
生きていく

～世界でたった一人のあなたへ～

いのち 尊さを 生きて

すべての人間は、生まれながらにして自由であり、尊厳と権利とについて平等であると、「世界人権宣言」はうたっています。わたしたちの人権は、どのような場面においても、最も尊重されるべきもの。尊いいのちが犠牲になった歴史を、決してくり返さないために。いのちの尊さを見つめ、そのいのちを輝かすことの大切さを伝えていきませんか。

の

伝えて

いく



「祖母の涙」

庄原市立高野中学校 1年 古家 麻里絵

「戦時中はのう、雑炊やいもばかり食べよったんよ。こんなごちそうは食べられなかったんよ。」

と、祖母が言った。私が食べ物の好き嫌いをすると、祖母はよく小さい頃の戦時中の話をしてくれた。

ある日、私は祖母にこう聞いた。

「おばあちゃんのお父さんって、どんな人だったん。」

祖母は、思い出すように少し間をおいて、「おばあちゃんのお父さんはねえ、おばあちゃんが小学校2年生の時に、戦争で亡くなったんよ。だから、ほんのちよっとしか一緒に暮らせなかったけれど、優しいお父さんだったよ。」

と、寂しそうに言った。

私は、祖母が思い出したくないことを聞

いてしまったのかな、とちよっと後悔した。けれども祖母は、小さい頃の話をもつりもつりと語り始めた。

「お父さんがなくなった時、お母さんがあんなに泣いたのを初めて見てね、私も一緒に泣いたんよ。お父さんは長男だったから、お母さんと、私と、弟と妹の4人で、分家してね、生活が苦しかったんよ。」祖母の目からは涙があふれていた。8歳の祖母が戦争で父を亡くし、どんなに辛かっただろうと思うと、私も心の中で泣いていた。

祖母は、生活を助けるために、やめたくなかった高校を途中で辞めたそう。 「もっともっと勉強したかったけれど、お母さんを助けるために辞めなければいけないかったんよ。」

祖母は、英語とピアノが特に好きだった

そうだ。今でも「乙女の祈り」などを、時々私に弾いてくれる。

「お母さんが歩けなくなって病院に入院していた時は、とても辛かったよ。でも、また帰ってきてくれた時は、私と弟、そして妹はお母さんに抱きついて泣いたんよ。」祖母はもう言葉に詰まってしまっていた。しばらくして、お母さんを助けながら働いたこと、4人で力を合わせて生活したことなどを話してくれた。

「お父さんが、戦死したことでとても悲しくて辛い思いをしたんよ。もう、二度と戦争なんかしてはいけないよ。お父さんの遺骨も、髪の毛一本も帰らなかった。フィリピンのどこかに、お父さんは眠っているよ。」

祖母は、時々お父さんが帰ってくる夢を見るそうだ。もしかしたら、今でもどこかで、

生きているのではないかという思いになることもあるそうだ。

祖母から色々な話を聞くことができて、祖母の小さかった頃のことか、少しずつ分かってきた。祖母は辛い思いを乗り越えて生きてきたのだな、と思った。祖母は、とても働き者だし、物を大切にする人だ。それに、とても優しい。そして、少々のことでもへこたれない強い人だ。私は、祖母が生きてきた過去があるから今の祖母がいるのだと思った。

今は、祖母の小さかった時代とは比べものにならないほど豊かだ。祖母の話を聞いて、物を大切にすることや、学べることのありがたさを感じた。また、命の尊さについて考えさせられた。戦争は、人の命を無惨に奪ってしまう。

命ほど尊いものはないのに、あまりにもあ
っけなく多くの人の命を奪ってしまう。

今でも、世界のどこかで、争いが起こっ
ている。テレビでは、テロや、争いのこと
がよく報道される。一人一人の尊い命が
どこかで奪われている。

「もう二度と戦争なんかしてはいけないよ。」
そう言った祖母の思いを、私達はしっかり
と受けとめていかなくてはいけないと思う。

夏休みに、「ビルマの砂」という本を読
んだ。作者である幅房子さんのお兄さん
は、遠いビルマでマラリアの熱にうなされ、
戦う力も、身を守る力も、抵抗する意志も
ないまま、爆弾にふきとばされてしまった
のだ。作者は、
「虫けらを殺すように殺されてしまったの
です。今でも私の中から、戦争の傷跡は

消えません。傷跡はわずかなかさぶたに
なっていますが、でもそのかさぶたをはげ
ば、今でも血が出ます。戦争の傷を持た
ない人達に、その傷の痛かったことを少し
でも分かってもらうことは、私達の責任の
ひとつでもあると、今思うのです。」
と書いておられた。

祖母の涙は、戦争の傷跡なのだ。祖
母は、自分の心にしまっておいたつらい
傷跡を私に話してくれた。私は、祖母の
涙から、戦争というものの深い傷跡が悲
しくて、決して消えないものであると感じた。
私達は、色々な傷跡を少しでも分かろう
とすることから平和について考えていく
ことが大切だと思う。そして、二度と戦争の
ない世の中になるように、みんなが努力し
ていかなければいけないと思う。



祖母の涙

生きた証、いのちの尊さを 次の世代に語り継ぐ。

戦争と災害から生かされたいのち

「死に直面したことで、生かされたいのちの尊さを伝えなければいけないと思いました」。尾道市在住の大谷光弘さんは、これまでの人生で二度、九死に一生を得る経験をしています。

一度目は戦時中、15歳で予科練を志願し、特攻隊員として出撃する直前に中止命令がでたこと。そして二度目は、土砂災害で生き埋めになりながら生還したこと。「多くの犠牲



者が出たなかで、なぜか自分は二度も生かされた。与えられたいのちは、自分だけのものじゃない。戦争でいのちを落とした者も、生き残った者も、苦しみを耐えぬいて懸命に生きたことを伝えたい」。地元の中学校や高校で、自らの特攻隊体験を語り継いできました。

「若い人には、身勝手な行為で自分のいのちを粗末にして欲しくないですね」。



悲しみを乗り越え、生と死を考える

教え子や同僚など、さまざまな死に出会ったことから、2002（平成14）年に『尾道・生と死を考える会』を発足。年10回、定例会を開いて、いのちと最前線で向き合う人々の話を聞き、会員同士で悩みを分かち合ってきました。

「悲しみを乗り越えて、生きてきたからこそ語れることがあると思っています」。大谷さんの貴重な体験談によって、多くの人がいのちの尊さを見つめ直しています。



尾道・生と死を考える会 代表 大谷 光弘さん

尾道市在住。『尾道・生と死を考える会』代表。1928（昭和3）年生まれ。旧制忠海中学校3年生のときに予科練に入隊。戦後、広島師範学校を卒業後、学校教育や幼児教育に携わる。多くの若者たちに特攻隊体験を語り継ぎ、いのちの尊さを伝える活動を続けている。

おわりに

この冊子は、『いのちを大切にする』ということについて、すこし立ち止まって考えてもらいたいと思い、編集したものです。

この空の下で一生懸命生きているいろいろな方から、あなたへのメッセージがつづられています。

どうか、この冊子があなたをあたたく包み、希望の光をともし、そして何かなやんだときに、また読まれることを願っています。

お忙しいところメッセージをいただいた、やなせたかしさん、西城秀樹さん、川嶋あいさんをはじめ、取材にご協力いただいた方々、寄稿して下さった方々、また、素晴らしい作文を書いて下さった中学生の皆さん、多くの皆様のお力添えで完成までたどりつくことができました。

最後になりましたが、関係者の皆様全員に感謝を申し上げます。